

実践報告 南区 常盤中学校

1 はじめに

本校は学校教育目標「あいで生きる」のもと、生徒間はもとより、教師・保護者・地域との関係も含めた広い意味での関係づくりを教育活動のあらゆる場面でやっている。

これまでの小中連携の取組は、小学生に対しての出前授業や小学生の中学校訪問をはじめ、行事参観や教師間の交流など多岐にわたるが、今年度は既存の校務組織を活用しながら、教師同士の交流の在り方を工夫して、9年間の学びを意識した取組となるよう再構築を図った。小中間で課題を共有することの意義や指導の連続性を考えた取組の重要性を検討したい。

2 実践研究の内容

○学習面における学びの連続性を意識した「授業づくり」

- ・ 8月23日（火）常盤小・常盤中によるTT形式小中合同授業及び交流会（全体・小グループ）
- ・ 授業会場：常盤小 参加校：常盤中 石山東小 ・ 授業学級：1年～6年 特別支援学級

○生徒指導面からのアプローチ「子どもの成長」についての交流

- ・ 1月17日（火）常盤中学校授業公開・交流会（全体・小グループ）
- ・ 授業会場：常盤中 参加校：常盤小 石山東小 ・ 授業学級 1年、2年 特別支援学級

3 実践の具体

（1）学習面における学びの連続性を意識した「授業づくり」

8月の授業交流に向け、6月に連携3校の教頭間で事前協議を行い、方向性を確認した。具体案は教務部が中心となり、TTによる小中合同授業と小グループによる交流を取り入れた。発達の段階にふさわしい指導方法や学習内容の縦のつながりを小中の教職員が実践・経験することで、9年間の学びを理解することの重要性について実感することをねらいとした。また、授業後の小グループ交流では、小学校教師から授業のルールやノートの活用などについての質問があり、9年間を見通した学習習慣の定着に向けて役立つ交流となった。



（2）生徒指導面からのアプローチ「子どもの成長」についての交流

中学校における1月の連携事業は、生徒指導部が中心となり、児童・生徒理解に焦点をあて、メインテーマを「子どもの成長」と位置付けた。給食から昼休み、授業、帰りの学活まで、普段通りの学校生活を公開することで、中学生になった子ども達の変容を見てもらうことをねらいとした。また、交流会では、生徒指導に関することや小中共通の課題である不登校について、3校の事情に詳しいスクールカウンセラーや本校の相談支援パートナーにも同席してもらい、理解と対応について交流を図った。



4 小中連携の充実を図る校内体制の在り方（平成 28 年度テーマ）について

○校務組織を生かした校内体制の充実

本校は、生徒数の減少に伴い教職員数も減少しており、特別委員会などの新たな組織編成は難しい。そこで、教師の負担軽減を図りつつ組織の機動力を発揮できるように、既存の校務組織を活用することとした。小中連携の方向性や学校外の連絡調整は教頭が行い、全体計画や学習面を教務部が、生徒指導面を生徒指導部がそれぞれ担当した。既存の組織ゆえに活動内容が決まれば、機動力の高い活動ができ、現在取り組んでいる各部の活動を紹介しながら、より実践的な交流をすることができると思う。

5 成果と課題

(1) 成果

○学習面における学びの連続性を意識した「授業づくり」

T Tによる合同授業は、小中教師が授業づくりを通して、9年間の学びの重要性を理解することにつながった。全体・グループ交流では、指導の連続性について話し合わせ、授業規律や宿題、ノートの取り方、家庭学習など学習習慣の違いについて交流した。中学校では、教科ガイダンスで、授業のルールやノートの取り方などを指導徹底している。また、教科毎に生徒の負担にならないよう配慮し、宿題を出していることなどを紹介した。この交流を通して小中の学習習慣の違いを共有することができた。また、小中ともに家庭学習の習慣が身に付いていないことが小中共通の課題として確認できた。

○生徒指導面からのアプローチ「子どもの成長」についての交流

給食から帰りの学活まで、普段通りの中学校生活を小学校に対して公開したことは、子どもたちの変容を見る良い機会になった。その後の交流会では、Q-Uや校則などの質問が出された。Q-Uは生徒一人ひとりの内面を理解し、いじめや不登校の予兆を見いだすのに有効なアンケートとして、本校での実施について紹介した。また、不登校について、スクールカウンセラーからの専門的なアドバイスは、今後の小中連携した指導に役立つ内容であった。また、教職員の交流を通して、小学校教師は中学校の生徒指導に高い関心があることがわかった。小中の生徒指導の考え方の違いについて共通理解を図ることができた。

(2) 課題

- ・学習面、生活面ともに、今回の成果を踏まえ、より具体的な実践につなげ、交流を深めていきたい。
- ・小中連携の時期や回数、内容について、校種の実態を踏まえ調整していきたい。
- ・不登校対策において、小中の情報共有の在り方を検討するとともに、当該の生徒を関係機関とつなげるシステムを構築していきたい。

(3) 今後の「小中連携」の実践に向けて

小中共通の「目指す子ども像」を共有し、学習指導、生徒指導の両面での小中交流を行っていく。学習面では、小中間のカリキュラムの共有を図り、授業づくりを進めていく。また、家庭学習の定着に向けた小中共通の具体的な取組を図っていきたい。生徒指導面では、不登校の問題をはじめ、現在、社会問題ともなっているスマホ依存等の「情報モラル」「ネットトラブル」についても情報共有を図り、共通の取組をしていきたい。

実践報告 南区 常盤小学校

1 はじめに

本校及び連携する常盤中学校は、本市郊外の芸術の森地区にあり自然的、文化的に恵まれた環境の中で教育活動を展開している。本校の卒業生のほとんどが常盤中に進学することもあり、教職員の授業参観、中学校教師による外国語活動の出前授業、6年生の中学校の合唱コンクール参観等、様々な形で教職員同士や児童生徒の交流を行ってきた。

今年度、これまでの連携の取組を更に深化させるべく「小中連携の充実を図る校内体制の在り方」をテーマとして、本校職員、常盤中職員の共通理解の下、研究の推進を図った。

2 実践研究の内容

- ・ 8月 …小学校授業参観と小中連携交流会 (常盤小学校)
- ・ 10月 …6年生の合唱コンクール参観 (常盤中学校)
- ・ 11月 …小中特別支援学級合同陶芸教室 (常盤小学校)
- ・ 1月 …中学校授業参観と小中連携交流会 (常盤中学校)

3 実践の具体

(1) 小学校授業参観と小中連携交流会

8月23日(火)、小中の教員が教育課程及び指導方法等について交流し、児童生徒について共通理解を図ることをねらいとして5校時に授業参観、その後、教員による交流会を実施した。

12学級で行った参観授業のうち、初めての試みとして、1年2組算数、3年2組社会、5年1組国語を小学校の学級担任をT1、中学校教諭をT2としたチームティーチング形式(以下TT)で行った。担任が事前に指導案を送付し、中学校教諭の授業での関わり方について話し合い、当日に臨んだ。

交流会では、自己紹介の後、低、中、高、特別支援の4グループに分かれ、「共に目指す子どもの姿～学びの連続性と系統性～」をメインテーマとした話し合いを行った。

中学校教諭からは、児童の学習規律がしっかりと定着していること、積極的に課題解決に向かう姿が見られたことなどが意見・感想として出された。また、小学校で培った力を中学校につなげる学びの連続性の大切さと、常盤の子の可能性の高さについて共通理解することができた。



(2) 6年生の合唱コンクール参観

毎年恒例となっている、6年生の中学校合唱コンクール参観を10月28日(金)に行った。

児童は、中学校全9クラス全ての合唱を聴いた。事前に音楽の授業の中で混声合唱について学んでいたということもあり、子どもたちの感想には、「中学1年生の歌声と中学3年生の歌声との違いに驚いた。」という声が多く出された。中学校3年間での学びや成長の一端を子どもたち自身が実感することのできる、貴重な機会となった。

(3) 小中特別支援学級合同陶芸教室

芸術の森地区、そして、芸術の秋にふさわしいこの取組も毎年恒例のものである。11月18日(金)、元教員の3名の講師を招いて本校図工室で行った。

本校児童は、講師や中学校教諭、先輩方とふれあい、創作を高めながら制作することができた。中学生たちもカラー粘土で思い思いのデザインで平皿や箸置きを作り、焼き上がりを楽しみにしていた。

本校教諭にとっては卒業生の成長を確かめる場、中学校教諭にとっては入学前の児童の様子をつかむ場として有効な取組となっている。



(4) 中学校授業参観と小中連携交流会



小学校3学期始業式前日の1月17日(火)に、夏季と同様のねらいに加えて、「子どもの成長」をテーマに行った。

小学校教諭が、1、2年、特別支援学級の計6クラスの授業を参観し、給食時間や昼休み、帰りのホームルームの生徒の様子も見ることができた。

1、2、3年、特別支援の4グループで行った交流会では、生徒の小学生時代を知る教員から、明るい挨拶、礼儀正しさ、落ち着いた学習態度を見て、子どもたちの確かな成長と中学校の指導の充実を感じたとの意見が出された。また、生徒の発表力・表現力の高さや、男女が仲良く、学年・学級の雰囲気よさが顕著だったという声も上がった。

今後、小中が目指す子ども像を共有すること、地域を足場とし、地域を学び、地域に発信する教育課程の構築等を課題とすることを確認し、交流会を終えた。

4 小中連携の充実を図る校内体制の在り方（平成28年度テーマ）について

(1) 小中連携のコーディネート

今年度、小中の連絡調整は各校の教頭が行った。小中連携のねらい、授業参観・交流会の日程、内容の検討を教頭が中心となって原案を作成し、教務主任との協議により、進めていった。

実務担当教諭による企画・運営も大事だが、今回、小学校の授業参観は、中学校教諭とのTTによる授業という新たな取組を行ったこともあり、教頭によるリードが功を奏したと考える。

(2) 専門教科・研究教科の連携

中学校教諭とのTTによる授業づくりや、中学校での参観授業の選択において、各自の専門教科や研究教科を念頭に置いて行った。校内教科・研究体制の連携も視野に入れることも重要である。

5 成果と課題

(1) 成果

- ・8月、1月の年2回、小中双方の職員が授業を見合い、交流をもつことで、共に常盤の子どもを育てていこうとする協働意識の高まりが実感できた。
- ・小学校の授業での中学校教諭とのTTという初めての試みを通し、中学校教諭は小学校における課題解決学習の効果を感じていた。また、児童にとっては、中学校教諭に初めて接し、親しみを感じるよい機会となった。
- ・「学びの連続性」「目指す子ども像の共有」といった共通の目標を見いだすことができた。
- ・合唱コンクールの見学では、小学生が中学生の歌声に憧れをもち、児童がより高い目標を目指そうとする「学ぶ意欲」を高めることができた。

(2) 課題

- ・小学校の授業での中学校教諭とのTTを行うことができたが、授業検討の時間をもつことが難しく、指導案を送付し、電話での調整にとどまった。小中合同で授業検討をする場、時間が必要と考える。
- ・「小中連携担当」の校務分掌への位置付けと、教育課程の編成、目標、年間計画の作成を図る。
- ・「学びの連続性」「目指す子ども像の共有」地域に根差した教育課程の具現化を図る。

(3) 今後の「小中連携」の実践に向けて

これまで本校と常盤中学校は、今回紹介した取組の他、6年生の中学校授業参観と入学に向けてのガイダンス、中学校英語科教諭による外国語活動の出前授業、特別支援学級の歓迎会・クリスマス会・お別れ会での交流など、様々な連携を行ってきた。

今後は、これまでの連携の取組を整理し、進化させるとともに、児童会と生徒会の交流など、新たな取組も検討し、更に充実させていきたい。

そのためには、小中で目指す子ども像を共有し、校務分掌に位置付けられた双方の小中連携担当者による年間を通しての情報交換、連絡調整を行い、各校の教育課程に組み込むことが必要不可欠となる。小学校から中学校へ、子どもたちの健やかな成長を支える小中連携を模索していきたい。